

---

# 赤夜

璃玖

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

赤夜

### 【Nコード】

N7119J

### 【作者名】

璃玖

### 【あらすじ】

全寮制の女子校に通う璃玖<sup>りく</sup>は、大の男嫌い。関わりを持つ異性といえ、校医の神崎先生と飼猫の璃央<sup>りお</sup>だけであった。

ある日璃玖は、悲惨な殺人現場を目撃してしまう。そこに遺棄された遺体は、信じがたいほど奇妙なものだった。血まみれの背中から生える漆黒の羽根、かすかに呻く、その死体。彼は吸血鬼の血を引いた、一族王家の末裔なのであった。

彼との共同生活を宣告された、男嫌い璃玖。

闇に闇を塗りかさねられた、重く暗い宿命を背負う彼。

闇に生きる吸血鬼一族の争いに、巻き込まれていく。

## 序章 前戯

十

街灯もなく、月明かりも届かない暗い街路地。

屋根もないそこは、ついさっき降りだしたばかりの雨がさえぎられることなく、身体を濡らした。

「……あーあ、腑甲斐ないなあ。それでも僕の兄さん？」

グシヤッ。

「……っ……」

「あはっ、いい顔。ねえ、セナ。君は今何を思ってる？」

問いを投げ掛けた相手は、地に伏せたまま動かない。否、動けなかった。

濡れた背中に片足を置かれ、彼は苦しげに呻いた。

「……ねえ、セナ？」

無造作に地面に広がる彼の前髪を片手でつかみ、顔を上向きにさせる。

「……れ……」

顔を歪める彼に、少年は至極満足気に笑みを浮かべる。

もう片方の手を地面に落ちた銀色の剣に伸ばし、自らの身長よりも長いそれを、彼の顔のすぐ前まで持ち上げた。

「…だま…れ…」

「ボクはね」

紅の雫が剣をつたい、流れる。

少年は愛おしそうにそれを眺め、ゆっくりと雫に唇を寄せた。

「君の命を食らうこの瞬間が、幸せでたまらないよ」

至福に目を細めた少年は、天高くかかげた銀の剣をためらいなく振り下ろす。

路地の向こう側に月明かりに照らされて、小さな猫が一声鳴いた。

## 一章 第一夜、危険な保健医

†

春が来た。

桜の季節、始まりの季節。

今日から始まる新学期。  
の春だった。

聖霞<sup>セイカ</sup>学園高等学校部で迎えた二度目

．．．赤夜．

シャクヤ

長く退屈な入学式を終え、璃玖<sup>リク</sup>たちはすぐに保健室へと向かった。

「…失礼しまーす」

「あーだるい疲れた。璃玖、お茶ー」

水未<sup>ミナミ</sup>が、我がもの顔でソファに腰掛ける。

璃玖はそのまま簡易キッチンへと歩き、ポットとカップを用意した。

「あのねえ君たち。当たり前のようにここへ来るのは、どうかと思うよ」

ついたての影から呆れ顔で現われたのは、この教室の主であり  
聖霞学園の校医、神崎紫苑<sup>カンザキオン</sup>。

普段は流したままの紫色の長髪を、今は一つにまとめている。

「センサーこそ、そのついたての影で何やってたわけ？また手エ出したんでしょ」

水未の言葉に、璃玖は思わず頬を引きつらせた。

正直なところ、璃玖は神崎先生が苦手なのだ。

その表情に気付かれまいとすぐに顔をそらしたが、神崎先生は目ざとくそれを見抜いていた。

「ホラホラ、伊藤さん変なこと言わないでもらえる？東条さんがものすごい目で見てるんだ」

「おーよしよし璃玖、こっちにおいで。そのおじさんに近寄ると子供ができるよ」

「あはは。ひどいなあ」

髪と同じ紫色の瞳が、スツと細められる。

背中に走る悪寒。すべてが見すかされている、そんな予感までもが渦巻いた。

「そんなに警戒しなくても、大丈夫だよ？僕は保健医だし、色々詳しいから」

そう冗談めかして（あるいは本気かもしれないけれど）言う神崎先生は、決して恐怖を与えるような人柄ではない。

頭ではそう思うのだ。

「璃玖の男嫌いが治らないのは、確実にアンタのせいだよ変態教師」

「え？僕ー？そんなことないよね、璃玖ちゃん？」

「…え、と…」

視線に堪えられなくなって、璃玖は目をそらして俯いた。

「傷つくなあ、その反応。僕、結構モテるんだよー？」

先生自身に問題があるだとか、そういうわけではなかった。

極度の男嫌い。



それが、璃玖の最大の悩みの種であった。

「女の子には、嫌われたことないんだけどな」

神崎先生はソファのひじ置きに腰をおろし、背もたれに肘をおいて頬杖をついた。

そして、小さなため息を一つ。

「自意識過剰なんじゃない？璃玖じゃなくても、アンタみたいな変態人間、誰だって身の危険を感じるよ」

つつけんどんに言い放つ水末に、神崎先生はやりわりと笑みを浮かべる。

そして何を思ったのか、おもむろに水末の耳元に唇をよせた。

「……ヤキモチ？」

「近寄んな、カンチガイ野郎」

「照れなくてもいいのに」

「はあ？寝言は寝て言え、セクハラ教師」

「ホント、素直じゃないなあ水末ちゃんは……あ、良い薰り」

漫才のように息の合った（？）やりとりも、いれたての紅茶の香りによって中断される。璃玖は三人分のカップをテーブルに置いた。

「はい、お茶淹れたよ。…先生もどうぞ」

傍にはできるだけ寄らないようにして、カップだけを先生の目の前に差し出した。神崎先生はにっこりと笑みを浮かべる。

「ありがとう、東条さん」

軽く会釈をして、すぐさま視線をそらした。ソファに腰を下ろした璃玖は、そんな行動をごまかすように自分のカップに手を添えた。

お茶菓子まで持ち出して、保健室での小さなお茶会が始まった。

「璃玖も、ちょっとは男慣れしたんじゃない？前はセンサーと、目も合わせようとしなかったのに」

さきほどの行動を指摘され、居心地悪さに目を伏せる。

男がいる前でのその話題は、タブーというものだ。あからさまに態度で示している璃玖が言えたことではないが。

「とは言っても、ほんの一瞬だけだねー。まあ、嬉しいことには変わらないよ」

「男が嫌いつて理由で、男子のいないこの学校選ぶくらいだもん、相当だよな」

璃玖たちの通う聖霞学園は徹底された女子教育で有名で、ごくに言う“お嬢様”たちが多く在学している。

彼女達のほとんどが初等・中等・高等学部とエスカレーター式に上がってきているために、璃玖や水末のような高等学部編入をする生徒は、ごくわずかしいない。

「まさか本気で聖霞に入るとはねえ。男嫌いも、ここまできたら末期だわ」

カラカラと笑う水末に、璃玖は非難の眼差しを向けた。

「…水末だって、悩むの面倒だからって私と同じ高校にしたじゃん」

「まあね。おかげで親元離れた生活をエンジョイしてるってわけ」

「あはは。水末ちゃんらしいね、その考え」

茶化すように言った神崎先生に、水末はギロリと鋭い視線を投げ付けた。

「…そうだ、璃玖。結局どうなったの？ルームメイトは」

水末の問いかけに、璃玖は飲んでいた紅茶を置いた。  
ため息を一つこぼして、話しはじめる。

「それが、いないんだよね」

「マジ？もしかして璃玖、今年はこのまま一人部屋なんじゃないの」

「んー…名前はあるんだよね、一応。でも、荷物運び込まれる様子もないし…春休み中だからかなって思ってたんだけど」

「へえ。で、結局、新学期始まってても現れないんだ。そのルームメイト」

「うん…“若松瀬名”ちゃん、って子なんだけど。知ってる？」

「わかまつせな？知らないなあ。一年生なんじゃないの？」

「かなあ」

真新しい制服に新しい環境のなかで緊張してばかりだった昨年。  
そんな璃玖たちは今年、新入生を迎える立場にあるのだ。

「それなら今日あたりにも来るんじゃない？ピカピカの一年生ルームメイト」

「うん、そうかも」

「来なかったらラッキー、広い寮室を一人で使い放題！」

「期待してるところに悪いんだけど」

それまで黙ったまま聞かされた先生が、口をはさむ。

「きつと来るよ、その子。ただちょっと事情があつて、遅れているんじゃないかな」

「センサー、その子のこと知ってるの？」

「んー、まあね」

「何だ、それなら話は早いじゃん。璃玖にその子紹介してやってよ、その方が手っ取り早く仲良くなれるし。でしょ？」

神崎先生はあごに手を添えて考えるような仕草をすると、曖昧にほえんだ。

「……んー、どうだろうね」

「……」

「……」

「……」

「……」

「……どうしよう…」

璃玖の頭から、音を立てて血の気が引いていった。

「おいおいおいこのヘンタイ保健医がああ！嘘でもいいから『大丈夫だよ』くらいのこと言っとけ！！」

「ごめんねー、僕嘘つけないんだよね」

「はあああ！？あんたのせいで、見てよこの璃玖の不安そうな顔、捨てられた仔犬のような目！どーしてくれんの！」

「あはは。まあでも、会ってからのお楽しみってことで」

にっこりと笑う先生に、璃玖と水未はそろってうさん臭そうな目を向ける。

「…璃玖ちゃんなら大丈夫。そんな気がするよ」

そんなことを言う神崎先生の瞳に、璃玖は恐怖を感じるよりも、どこか複雑な感情を見たような気がした。

危険な保健医・・・END

## 黒い猫を追いかけて

すっかり落ち込んでしまった璃玖を氣遣つてか、水未は部屋の  
前まで付き添つてくれた。

たまに見せる水未の優しさが、璃玖は大好きだった。口に出し  
ては言わないけれど。

「じゃーね、おやすみ。ルームメイトのこと、あんま気にしすぎな  
いように。どーせあの変態のハツタリなんだから」

「…ん、ありがとう」

「あと、もうひとつ。重要な話なんだけどさ」

水未が用心深く、あたりの様子をうかがった。

人の姿がないことを確認して、水未は声のトーンを落として話  
しはじめる。

「リオのこと。バレないようにね」

「そっか、うっかり隠すの忘れるとこだった」

璃央。<sup>リオ</sup>璃玖がこっそり飼っている雄猫で、その秘密を知ってい  
るのは水未と、そして校医の神崎先生だけ。

「新しく来る子が猫嫌いだったら、マズイからね。相手の様子がわ  
かるまでは、口が裂けても言ったりしないこと」

「うん」

また明日、と手をふってドアを閉める。用心のため鍵をかけた。

「リオー、ただいま」

部屋に入ってまず探すのは、愛猫の姿だ。  
そしてその姿は、すぐに見つかる。

「ニャー」

手を伸ばして抱き上げれば、嬉しそうに擦り寄ってくる　はずだった。　は

「ニャア、ニャー」

「…！ちよつと璃央、静かに…」

いつもは大人しいのに、様子がおかしかった。  
ひどい興奮状態にあるようで、璃玖の手から逃れるように暴れた。

「璃央てば、騒いだらバレちゃ……………痛っ！」

鋭い爪が、璃玖の皮膚を引き裂いた。浅い傷ではあったが、赤い血がにじみヒリヒリと痛んだ。

璃央は玄関のドアの前に立ち、じっと璃玖を見つめていた。



「どうしたの、璃央…」

ドアの前から離れようとしなない。

璃央の緋色の瞳は、有無を言わせないような力を宿していた。

「……」

いつもならば決して外に出したりはしないけれど、いつもとちがう璃央の様子に璃玖はすっかり怯えてしまっていた。

おそろおそろ近づき鍵をあげ、ドアを開いた。

それからの出来事は一瞬だった。わずかに開いたドアの隙間から、璃央は勢い良く飛び出していった。

璃玖は、その小さな後ろ姿を追って、ただひたすらに走った。

「……リオ！…待っててば、リオ！」

呼び掛けても、璃央は走るのをやめない。

黒いその姿は闇に溶け、何度も見失いそうになるのを璃玖は必死に追い掛けた。

「…はっ…はあ…リオ…？」

角をまがったと思えば、璃央の姿は見えなくなっていた。

「…うそ、やつ…璃央！」

見失ってしまった。焦りと悲しみに、璃玖は頭が真っ白になっ

てしまった。

あたりは闇。璃央を追って入り込んだそこは狭い路地で、街頭もない。

「どうしよう…」

途方にくれ、璃玖は足を止めた。

璃央の姿を完全に見失った今、璃玖に為す術はなかった。

ポツン

ポツ、ポツ

ザアア

…

「あ…」

前触れなく降りだした雨は、容赦なく璃玖の体を濡らした。傘もなければ、雨をしのげる場所もない。

「ギヤアア！」

奇妙な鳴き声が聞こえた次の瞬間、黒い何かが路地の向こうを横切った。

衝撃音とともに、雨が降り出して間もない乾いた地面からは、白い粉塵が舞った。

「けほっ…何…？」

横切った“何か”が突っ込んでいった場所へと、璃玖は恐る恐る近づいていく。

瓦礫に埋もれるようにして、その“何か”はあった。

「…璃央？」

黒い猫だった。

それは璃玖のよく見慣れた姿で、横たわっていた。

「うそ…嘘うそ、嫌っ…璃央！璃央っ！」

璃央の体をおおっている瓦礫をひたすらにかき分けて、璃央の体をそっと抱き上げた。

目を閉じたまま、動かない。

「……っ！」

いったい誰がこんなに酷いことをしたのか。  
信じられなかった。信じたくなかった。

「何だよ、璃央…」

璃玖は、璃央が飛ばされてきたその方向に目を向けた。  
許せないと思った。

一人っ子だった璃玖は、小さい頃からずっと璃央と一緒にだった。  
兄弟同然に暮らしてきたのだ。

「誰？誰が璃央をこんな目に合わせたの…っ！」

視線の先に、何か動くものを見たような気がした。

璃玖は璃央を抱いたまま立ち上がると、路地の内部に向かって  
ゆっくりと進んだ。

頬を伝うものが涙なのか、雨の雫なのか、璃玖にはわからなかった。  
った。

「…璃央を傷つけたのは、キミ…？」

目の前に広がる惨劇を、璃玖はどこか夢見心地で眺めていた。  
否、果たしてこれが現実であって良いものなのか。

足元に広がる血の池。雨に打たれて、それは次第に璃玖の靴を  
も濡らした。

横たわる、真っ赤な少年。その華奢な背中を、長く太い剣によ  
って貫かれていた。

そして、闇に紛れてしまいそうな漆黒の片翼。

「…天使…？」

受け入れがたい出来事が、璃玖の脳内に真実として流れ込んで  
いく。

腕に抱いた璃玖を、璃玖はさすがのように一層強く抱き締めた。

「…ぷっ…あはは！」

この惨状に不釣り合いな軽い声が、璃玖の耳に届いた。

「黒い羽根の“天使”か。なかなかユニークだね、璃玖ちゃん」

ドクンドクンと不規則に波打つ心臓は、璃玖への危険信号を表していた。

この場所にいるということは、間違いなく、目の前に広がる惨劇に関わりのある人間。

しかもその声は紛れもなく、璃玖の聞き慣れた声だった。

「こんばんは、璃玖ちゃん。元気？」

どうして。

そう問い掛けたかったはずなのに、璃玖の喉からは掠れた息の音がもれただけだった。

恐ろしいくらいに、いつもの笑みを崩さずに立っていたのは神崎先生、その人だった。

「元気なワケないか、こんな状況を目の前にしてるんだもんね…ああ、こんなになっちゃって」

少年の背を貫いていた剣に、先生は手を添えた。

一瞬剣の柄を握りしめたかと思うと、次の瞬間には、剣は空中

で霧散して見えなくなった。

「さて、と。どうしよっかな」

そう一人ごちて、先生は璃玖に目を止めた。

「見ちゃったんだもんね、璃玖ちゃん。残念だけど」

先生の指先が額に触れると、全身は石のように動かなくなる。

声も出ない、悲鳴も出せない。

支えを失った璃玖の体は、璃玖の手から滑り落ちて地面に転がった。

「…っ…！」

「手荒なことはしたくなかったんだけど」

何もできないその状況下において、涙だけが璃玖の感情に従い流れ落ちていった。

「ごめんね、璃玖ちゃん」

暗くなる視界の端に見た神崎先生は、やはり、いつもの笑顔だった。

黒い猫を追いかけて・・END

## 闇の住人

+

「……っ」

全身に走る鈍い痛み、思わず呻いた。  
最悪の目覚めだった。

「気付いた？」

「…ああ」

「痛むかい？めっちゃめっちゃにやられたみたいだね」

どこかおもしろそうに話す彼が気に食わなくて、睨みをきかせて見つめる。

「冗談、そんなに怒らないでよ」

「…シオン」

「んー？」

「誰、こいつ」

すぐ隣のベッドで眠る患者に、少年は視線を移した。  
片方は無傷で、もう片方は酷い怪我を負っていた。  
先程の記憶の一部が、脳裏によみがえる。



「…あの猫か」

「覚えてるんだ？」

「そのあとの記憶は、ない。…この女は」

「その“黒猫さん”の飼い主、璃玖ちゃん」

飼い主という言葉に、疑問を覚えた。思案が顔に現れていたのか、シオンは唇に人差し指をあてた。

「色々と事情があるんだよ、“彼”にもね」

関わる気など毛頭なかったので、それ以上触れることはしなかった。

「…で？消したんだろうな、そいつの記憶」

「そのことなんだけどねー、ちょっと様子を見ようと思って」

「…何のつもりだ？」

「んー。ちょこつとだけ、事態が複雑なんだよね。まあ任せておいてよ」

彼はそう言って、にっこりと微笑んだ。

+

目を開けてまず目に入ってきたのは、青いカーテンだった。  
それがいつも見慣れている保健室のついたてであると気付くのに、  
そう時間はかからなかった。

「……リオ……いつ!」

勢い良く起き上がれば、割れるような痛みが頭に響いた。思わずそのまま、白いシーツに伏せる。

「……リオ、璃央りおおっ……」

肩が震えた。

脳裏に焼き付いて離れない映像が、何度も何度もリピートされた。

璃央は、もう。

「……ニヤアア」

「!」

確かに聞こえた、鳴き声。聞き間違えるはずがなかった。

ベッドから飛び降りて、璃玖は青いカーテンを乱暴に開け放った。

「ニャー」

体の至る所に巻かれた白い包帯は、璃央の黒い身体では余計に目立って見えた。

白い処置台の上に座る璃央は、璃玖の姿を見ると、よたよたと歩きはじめた。

「だめだよ璃央、ひどい怪我してるのに……！」

近寄ってこようとする璃央を、璃玖は慌てて止める。

璃玖の方からそっと近づいて、璃央の視線に合わせて顔を寄せれば、嬉しそうに頬に擦り寄ってきた。

「良かった、璃央……」

ガラリという音と共に、スライド式のドアがゆっくりと開く。

「あ、璃玖ちゃん。目、覚めた？」

璃玖は反射的に璃央を抱きかかえると、後ずさるようにして現れた人物との距離をとった。

「相変わらずの反応だなあ、璃玖ちゃん。水未ちゃんがない時に僕に関わるのは嫌？」

困ったような表情を浮かべて問い掛けてくる、神崎先生。

残酷な光景と彼の笑みが、重なり合って見えた。

「や…嫌っ、来ないでよ！」

「うーん、すっかり嫌われちゃったなあ」

ため息混じりにそう呟いて、神崎先生はソファに腰掛ける。  
璃玖は警戒心を解かぬまま、神崎先生を睨み付けていた。

「ま、仕方ないね。誤解を招くようなことをしちゃったのは、僕だし」

「…誤解…？」

「そ、誤解。んー、何から話そうかなあ」

先生は璃玖から璃央へと視線を移して、思いついたように、もう一つのベッドをおおっている青いカーテンを見つめた。

「そうだね…まずはお互いに自己紹介、かな？」

そう言うなり、先生はカーテンを勢い良く開いた。

「…！」

そこにいたのは、見知らぬ少年だった。  
カーテンが開け放たれたせいで差し込んでくる蛍光灯の光に氣付いたのか、彼は閉じていた目をゆっくりと開いた。

「…何」

深い緑色をした瞳が、璃玖をとらえる。

「璃玖ちゃんがね、目を覚ましたんだ」

「知ってる…騒がしかったから」

額に手を当てて、さも面倒臭そうに答える少年に、璃玖は男に対する嫌悪より先に腹立たしさを覚えた。

「紹介するね、璃玖ちゃん。この子は若松瀬名……単刀直入に言うと、君の新しいルームメイトだよ」

「わかまつ、せな…？」

わかまつせな、ワカマツセナ “若松瀬名”。

「うそ……」

「嘘じゃないよ？新入生として、今年から高等学部に編入したんだ」

「だって、男なのに！」

てつきり、女の子だとばかり思っていた。

いや、そうではない。……男だなんて、考えもしなかった。

そもそもこの聖霞学園への入学は、女子のみに限られているのではないのだろうか。

「戸惑うのも無理ないよね」

茫然と立ち尽くしたまま言葉を失った璃玖に、先生は笑みを浮かべながら言った。

「でもこの学園への入学にはもともとから、性別の条件はないんだよ。過去に、前例だってある」

パチンという軽い音とともに、古びた本のようなものが宙に浮かんだ状態で現れた。

声を出すのも忘れて、璃玖は目を見開いた。

「これが証拠だよ」

パラパラとめくるたびに見える写真から、それが古いの卒業アルバムであることがわかった。

かなり昔の代物なのか写真はすべて色がなく、白黒だった。

「見てごらん璃玖ちゃん」

璃玖は先生につながされて、開かれたページに視線を落とす。クラスごとにまとめられた個人写真のページだった。

ページに並ぶ個人写真のなかに、見覚えのある名前を見つけた。

「「神崎紫苑」……」

面影は、確かにあった。おさげ髪的女子生徒の顔写真のなかに、その姿を見つけた。

はつきりとしていて整った目鼻立ちはどこか中性的で、肩のあたりまである髪の毛がさらにそれを強調させていた。

それは見間違えようがなく、神崎紫苑先生本人であると認めざるをえなかった。

「でも、こんなに古いアルバムにどうして……」

すっかり頭が混乱してしまった。

「さて、ネタばらしは一通りすんだし。そろそろ説明しないと、璃玖ちゃんも困るよね」

先生はそう言うなり指をパチンと鳴らした。

音とともにどこからか髪とペンが現れて、先生の手の中におさまった。

「これはね、単なるマジックとかじゃないんだよ。術って言ってね、まあいわゆる魔法みたいなものかな」

話しながら、紙のうえにペンを走らせ書き込んでいく。

紙には“寿命”“魔術”の文字、そしてイコールと書かれて、“吸血種族”と付け足された。

「僕らは魔術を扱えるし、寿命も長い。抵抗力や治癒力、運動能力も普通の人間に比べてはるかに高いんだ。だから普通なら命を落とすという怪我でも、死ぬことはない。それはつまり僕らが人間じゃないから、なんだけど」

普通の人間じゃない。

先生の言葉に、璃玖は紙にかかれたある言葉に目をとめる。そして確かめるように、呟いた。

「吸血、種族……？」

「1」名答」

まるで璃玖の反応を楽しむかのように、先生はにっこりと微笑んだ。

「……説明は済んだのか、シオン」

璃玖が頭の整理を終えるより先に、それまで黙ったままだった少年が口を開いた。

「まあね。ちよつと乱暴なやり方だったけど、一応ひと通りは」

「それなら説明しろ。どうして俺が、この女と一緒に部屋に住まう必要がある？」

少年の圧力的な物言いに、璃玖の少年に対する嫌悪は深まるばかり。しかし先生はというととくに気にする様子もなく、いつもの笑みを崩さなかった。

「んー？何故かっていうと……おもしろいから、かなあ？」

璃玖と少年とが、まったく同じ反応を見せた瞬間だった。

「男嫌いの璃玖ちゃん、人間不信のセナ。璃玖ちゃんは学校に内緒で猫飼っちゃってるし、セナは人間じゃないし。問題児同士が同室で暮らすなんて、おもしろそうでしょ？」



聞き間違いであつたらどんなに良いだろうか。

そうであれば璃玖は、全身をかけ巡る激しい怒りを、抑えることが出来るのに。

「…………どうやら本気で殺されたいらしいな」

少年・瀬名もまったく同意見だったらしく、全身から真っ黒のオーラを放ちながら先生を睨んでいた。

パチンという音の後、神崎先生の悲痛の叫びが保健室中に響き渡ったのだった。

．．．NEXT．

## 闇の住人〔2〕

吸血種族。

はるか昔から、人間の世界からは見えない闇の世界において栄えてきた、もう一つの文明社会。

そして、人間の世界とは対になる存在。

「僕たち吸血種族はその名のとおり、人間の生き血を糧にして生きているんだ。人間と同じように食事を摂ったりもするけれど、吸血種族の力の源は、人間の血に他ならないんだ」

見た目は人間と何ら違いはない。

だからこそ神崎先生のように、いとも簡単に人間の世界へと馴染むことができるのだ。

「人間には人間の世界があるように、吸血種族には吸血種族の世界がある。けれど、僕らみたいな例外もいる」

能あるタ力は爪を隠す。彼らは人間より優れた様々な能力を隠して、人間のようにふるまって生きているのだ。

「先生も…血を飲むんですか？」

普通の人間だと信じて疑わなかった。疑いようもなかったのだから。

自分と同じような姿形をした彼らが、同じような姿形の人間の血をを食料として食らっている姿を思い浮べ、璃玖は吐き気を覚えた。

「それは、ね。僕自身も、生きるために人間の血は不可欠だから」

神崎先生によって語られた、非現実的すぎる事実、璃玖は気が滅入ってしまいそうだった。

「…先生にとって私たちは、ただの食料でしかなかったってこと、ですよ」

目の前のテーブルに置かれた紅茶は、すでに冷めきって湯気もたてない。これを飲むのと同じように、彼らは人間の血を飲むのだろう。

「まあ、否定はしないかな。生きるためとはいえ、生徒達の血を飲んでいたことは事実だから」

不意に、水末の顔が頭に浮かんだ。

普段先生に対してひどいことを言っただけでも、水末は先生のことを慕っていた。

「何なの…信じらんない…！」

水末の気持ちを踏みにじるような言葉に、璃玖は怒りに震える手を握りこんだ。

無意識のうちに、璃玖は先生に向かって腕を振り上げていた。

「……！つと」

振り上げた手のひらは神崎先生に当たることなく、手首を掴まれ動きを封じられる。

掴まれた手首から這い上がってくる悪寒に、璃玖は彼の手をを全力でふり払った。

「僕を殴ったって、何の解決にもならないよ？璃玖ちゃん」

彼が璃玖の心理を見抜いていることに間違いはない。

ことごとく人を馬鹿にするような態度に、璃玖は悔しくて下唇を噛みしめた。

悔しい。

悔しい、悔しかった。

「放して…！」

「少し落ちつこう、璃玖ちゃん」

再び手首をつかまれた次の瞬間、視界が揺らいだ。

「…あ…っ！」

意志とは裏腹に傾いてゆく身体。来るであろう衝撃に、璃玖はきつく目を閉じた。

しかし璃玖が感じたのは痛みなどではなく、何か温かいものに包まれるような感覚。

ゆっくりと目を開くと、すぐ近くに神崎先生の顔があった。

「ちょっと手荒だったかな？」

そう言いながら先生は璃玖の身体を、再びソファへと座らせた。

「今のも、術…？」

「そ。まだ話は終わってないからね」

思考回路はまるで、霧がかかったようにぼんやりとしていた。  
しかし不思議なことに、先生の声だけは、はっきりと耳に届いていた。

「水末ちゃんの血を飲む気はないよ」

「…え？」

「水末ちゃんは、僕に好意を持ってるから」

さも当たり前のようにサラリと言ったのけた先生に、璃玖は瞬きも忘れて彼を見つめた。

「僕が血を飲むのは、保健室を訪れる不特定多数の生徒。気付かないように少量しか飲まないし、記憶も消すよ」

「水末の気持ちを利用するようなことはしない、ってこと？」

「…綺麗事に聞こえる？」

先生の笑顔にはどこか、影があるようにも見えた。璃玖にはその理由など知るよしもなく、ただ黙っていることしかできなかった。

「さて、あとは何を話せば良いかな。何か聞きたいこととか、ある？」

先ほどの雰囲気から一転、あまりにも軽い口調で尋ねられると、逆に萎縮してしまう。

疑問に思うことは多すぎるくらいにあったけれど、順序立てて問う余裕もなかった。

「先生は……あなたたちは、なぜ“人間の世界”に来たの？血が欲しいから？」

尋ねてから、馬鹿げた質問だと璃玖自身思ってしまう。

人間とは相容れない存在であるはずの彼らが、人間の世界へとおもむく理由。それはただ一つ、生きるための糧を求めてのことだろう。

「この世界に来た理由、ねえ。覚えてないかな、だいぶ昔のことだから」

「そんなふうに言って、はぐらかすつもりですか」

「あはは、意外。璃玖ちゃんって案外気の強い子だったんだ」

「ごまかさないでください」

「んー、嘘はついてないんだけどな。小さい頃から僕はこっちの世界で育ったんだ。長い間、ずっとね。馴れ親しんだ世界に居たいと思うのは、何も変なことじゃないでしょ？」

「そうです、けど……」

「僕の話はよしとして。君のルームメイト…つまりセナくんの事情は、ちょっぴり複雑なんだよね。聞きたい？」

言い終わるが早いか、先生の頬を何かがかすった。背後にある薬品棚のガラス扉が、音を立てて割れる。

「…余計なことを喋るな」

「ホント、口より手が先に出るんだから」

頬にできた赤い傷から、ワインレッドの液体が流れて頬を伝う。

「はー、仕方ない。この話はまた、セナの居ないときにしようか。どっちにしろ、セナはこんな大怪我じゃ学校へもいけないし、絶対安静だしね。今夜はもう遅いから送るよ、璃玖ちゃん」

先生の言葉に時計を確認すると、時間も忘れて話していたことに気付く。

明日から学校も始まるというのに、何の支度もできていなかった。

「大丈夫です、帰れますから」

「…そっか、わかった」

璃玖は、となりで眠っていた璃央の身体をそっと抱き上げる。

「そうそう、リオくん…だったかな？傷はそこまでひどくはなかったみたい。しばらく安静にさせておけば、回復するよ」

「……ありがとうございます。璃央を、助けてくれて」

「どういたしまして。また、明日ね」

璃玖は先生にむかって小さく頭を下げ、保健室を後にしたのだ。  
った。

+

少女が去った保健室は、静けさに包まれていた。

「……わざわざ嘘をつく必要があったのか」

ベッドに横たわったまま、少年が言った。

「何のこと？」

「術を使ったろう、あの猫に」

「ごまかせないねー、セナの目は」



「アイツの力は、俺が一番知ってる」

「はは、そうだね」

皮肉を言った彼に軽く笑い声をあげて、握りこんでいた手のひらを開いた。

「…一度死んだよ、リオ君」

「だろうな」

「あの子の力ってホント、計り知れない…容赦って言葉を知らないらしいから。セナもそう思うでしょ？」

猫の姿の彼　リオは、一度その“魂”を身体という器からはじき出されていた。

魂と身体の分離、つまり、一瞬にして対象物を死へと追いやる恐ろしい術だった。

手のひらは赤黒くただれ、ワインレッドの吸血種族特有の血がにじんでいた。

「他人の術を解くのに、こんな痛手を負うとは思わなかったよ。王族直結の血って怖いね、やっぱり」

「…何故助けた」

「んー、気分？恩義をかければ、璃玖ちゃんも僕になついてくれるかなって」

あながち冗談でもない言葉をこぼせば、彼は訝しむように目を

細めて小さくため息をついた。

「……寝る」

「おやすみ」

何秒もたたないうちに聞こえはじめた浅い寝息に、紫苑は遮光カーテンをゆっくりと閉めたのだった。

闇の住人・・・END・

再び、保健室へ

教室に入るなり、いつもとはちがうその雰囲気には璃玖は思わず足を止めた。

「なに？この騒ぎ」

水末も訝しげに顔をしかめ、教室内を眺める。  
そんな二人に気付いたクラスメイトが、興奮気味に話しかけてきた。

「あつ、伊藤さんに東条さん。おはよう」

「おはよ…何の騒ぎ？これ」

「それがね、大変なの！噂なんだけど…」

彼女が話しはじめようとした、その時だった。  
璃玖と水末の背後に荒い息をしながら生徒が駆け込んできて、教室内向かって叫んだ。

「今つ、職員室に噂の男の子が…先生方が、新生だっておっしやつていたわ…！」

時が止まったように静まり返った教室は、彼女の荒い呼吸音だけが響いていた。

「どういうこと？聖霞学園に、男子生徒？」

「信じられない、この学園に野蛮な男が入学するだなんて！」

飛びかう声は様々だった。興味深そうに噂話をする生徒もあれば、不安そうに話しだす生徒、シヨックに言葉をなくす生徒もいた。

「馬鹿馬鹿しい、世の中の半分は男だつての。んなことで騒ぐとか、くだらない。ねえ璃玖」

「……………」

「璃玖？」

「…ごめん、ちょっと行ってくる」

「はあ？…ちよつ、璃玖…璃玖ってば！」

水末の声を背中に受けながらも、璃玖は振り向かず歩いた。しだいに歩調は早まり、やがては駆け足になっていく。

階段を一番下までかけ降りて、廊下をひたすらに走った。

つきあたりにあるドアを、ノックもしないまま勢いよく開け放った。

「はあ、はあ…」

肩で息をする璃玖を、紫色の髪をした保健医・神崎紫苑先生は不思議そうな目で見つめた。

「璃玖ちゃん？どうしたの、そんなに慌てて」

「あの人…」

「え？」

「若松瀬名って人、今どこに…」

あの不可思議でおぞましい出来事から一週間近くがたち、それ以来璃玖が少年に会うことはなかった。

全てが夢であつたのかと思ってしまうほどに、かわらない日常を送っていた。かと言って、目の当たりにした様々な事実を受け入れていないわけではなく。

あの少年が聖霞学園の新生だということや、璃玖のルームメイトであるということは、先生の悪戯な心から生まれた悪い冗談だとばかり思っていたのだ。

「セナを探して、ここへ来たの？」

驚いたように見開かれたままだった先生の目が、ずっと細められる。

唇がゆっくりと弧を描き、先生の顔には穏やかな笑みが浮かんでいた。

「セナのことを気にかけてくれるなんて…君たちは良いルームメイトになれるよ」

「それ、冗談話じゃなかったの…？」

「冗談、って？本当だよ、セナは聖霞学園の新生で、璃玖ちゃんのルームメイト」

明るい調子で話す先生に、璃玖は絶句した。

「セナの傷、僕の献身的な看病のおかげで、もう大分治ったしね。やっと普通の生活ができそうだよ」

先生はご機嫌な様子で、鼻歌まで歌いながらキッチンに立っていた。

手際よくお茶の準備をすすめる先生の後ろ姿を、璃玖は鋭い眼差しで見つめた。

「いい加減にしてください!」

あらん限りの力をこめて、璃玖は叫んだ。

「学校中の生徒達が噂して、混乱してるっていうのに…何の説明もないなんて、そんなのおかしいです」

「説明って言われてもねえ」

用意した三人分のお茶をテーブルまで運ぶと、先生はソファにゆったりと腰掛けた。

「生徒達に、何て言ったらいい？僕やセナは人間じゃなく吸血種族で、魔術が使える妖怪です…って、そう言えばみんなは納得するのかな？」

「それは…」

「そんなこと誰も信じないだろうし、言ったところで余計に騒ぎに

なるだけ、でしょ？」

先生の口調がどことなく威圧的に感じられ、璃玖は口をつぐむ。

「璃玖ちゃんだって、実際にあの出来事を自分の目で見ていなければ、僕らのことを信じてなんかくれなかったよね？」

「……………」

「まあ、当然だと思うよ。実際に目で確かめもしないのに根も葉もない噂話を信じるなんて、それこそくだらないからね」

ため息混じりにそう言って、先生は読みかけだった本を手に取りそのまま読み始めた。

「噂ってというのは意図的に流すことは出来ても、消し去ることは不可能だからね。なるようになるよ、きっと」

彼の言論はもつともだった。全校にまで広まってしまった噂を璃玖一人の力でどうにかしようなどとは思わない。

そもそも話されていることが事実である以上、事が収まるのをただ黙って見ていることしか出来ないのだ。

「セナの反応だけが、少し心配だけだね」

ため息混じりに言う先生は、言葉とは裏腹にかすかに笑みを浮かべていて。

“違う”と、璃玖は悟った。

彼は心配してるとか、そういうわけではないのだ。  
そう、彼はまるで。

「楽しんでるようにしか見えません」

半ば睨むようにして、璃玖は先生を見つめた。

「あれー、わかる？実はすごい楽しみなんだよね、今後の展開」  
カップを片手に、本に向けていた目を璃玖へと移した。先生の表情はというと、これまでにないくらいの満面の笑み。

「さて、二人目のお客さんだ」

そう言って先生が視線をドアへ移すと、ノックもなしに保健室のドアが開かれた。

「やあセナ。そろそろ来ると思ってたよ」

少年・若松瀬名はというと、先生のほうを見向きもせず空いたベッドに腰かけた。

「どうだった？初めての登校は」

「人間だらけだった」

「あたりまえだよ、ここは人間の世界なんだから」

事情を知らない人間が聞いたならば、まず変な目で見られるこ



と間違いなしの会話。

璃玖は改めて、この二人が別種族の生き物であることを感じる。

「…疲れた」

「お茶は？セナの分もある」

「いや、いい」

少年は冷ややかな声色で受け答えをするだけで、先生と目を合わせることもしなかった。

「…猫の様子はどうだ」

やはり少年は、目も向けないままに問い掛けてきた。猫という単語から、それが璃玖に向けられた質問だということに気付く。

「……リオなら、大丈夫。もうだいぶ良くなってる」

怪我は、驚くほどの速さで治癒していった。後遺症なども残らなかったのは、まさに奇跡としか言いようが無かった。

ただ璃央はあの日以来、璃玖のそばから離れないようになった。学校へ行くときも、あとを付いてこようとするのだ。そんな璃央をなだめるのに、最近璃玖は苦勞していた。

「よっぽど怖い思いをしたのか、私のそばから離れようとしなくて」

璃央に対する愛しさがこみあげて、自然とこぼれる笑み。

「…あんたは、そんなふうに笑うのか」

「……？」

少年の口からこぼれた言葉に璃玖は首をかしげ、先生のほうに目を向ける。

「そっか、説明してなかったんだね」

璃玖の視線のわけに気付いた先生は小さく笑うと、胸に手を当てる仕草をした。

「僕たち吸血種族にはね、心がないと言われてるんだ」

「心がない…？」

「そう。つまり何も感じない。笑わないし、涙も流さない」

話をする先生は、いつも変わらない笑みを浮かべているのを、璃玖は知っていた。

自然すぎて、逆に不自然。

璃玖が今まで心のどこかで感じていた違和感の正体が、はっきりと見えた気がした。

「でも…」

そう、でも。

「先生に心が無いなんて、感じたこと…なかった」

いつも変わらない笑みとはつまり、それ自体は偽りの表情なのか  
もしれない。

けれど、たまに見せる“本当”の表情も、璃玖は知っている。

「…僕、思うんだ」

組まれた手のひらに視線を落としている先生の横顔は、ほんの少しだけ戸惑っているようにも見えた。

「僕らは、心が無いんじゃない。心を知らないだけだ、って。泣き方を知らない、笑い方も知らない。僕らの心は、時を止めてしまった」

「笑わないんじゃないって、笑い方を知らない…？」

「そう、その通り」

笑いたいのに、笑えない。

泣きたいのに、泣けない。

溢れだしそうな感情は行き場を失い、自分自身の内に閉じ込められてしまう。

「僕らの仲間のほとんどが冷徹で残酷なのは、そのせいなんだよね…きっと」

秘められた感情は内で爆発し、それは自分自身を傷つける凶器に  
しかない。

心は歪み、人格を崩壊させていく。

彼らの中に、愛は存在するのだろうか。

「璃玖ちゃん？」

「……」

「大丈夫……？」

静かな保健室に、嗚咽の音がやけに大きく響いた。

「意味、分かんない……止まんない……」

人前で、しかも天敵である男の前で涙を流すなんて、無防備にも  
ほどがありすぎる。耐えがたい屈辱とさえ思えた。

それでも璃玖は、溢れてくる涙を止めることが出来なかった。

「人間の涙、か」

気付けばすぐ近くに少年がいて、感情の無い瞳でただ璃玖を見つ  
めていた。

少年の瞳はやはり深い色をしていて、見つめていると、吸い込ま  
れてしまいそうな錯覚まで感じるほど。

「純粹だとか無垢だとか、シオンは言っていたが」

少年の指先が、璃玖の頬に触れる。

機械的で無感情な言葉とは裏腹に、壊れ物に触れるかのような動作だった。

「そんなことは、わからない……けど」

撫でるようにやさしく触れて、璃玖の涙を拭った。

「……綺麗だ」

指先に伝った涙の雫を見つめる少年の表情は、どこか哀しげで。今にも消え入りそうなくらいに儚い存在のようにも思えた。

しばらくの間、璃玖は少年から目を離すことができなかった。

・・・NEXT・

## 再び、保健室へ〔2〕

「せんせー、オハヨ。璃玖来て…る？」

ノックと同時にドアが開いて、現われた水未と璃玖の視線がぶつかった。

言いかけた言葉は不自然に途切れ、水未はそのまましばらく立ちすくんでいた。

「あー、水未ちゃん。元気？」

一瞬にして凍り付いた空気に、先生は引きつった笑みで水未に手をふった。

残念ながら不自然きわまりないその動作に、水未の顔から表情は消えてゆくばかり。

「…水未？」

いつもとは違う水未の不穏なオーラを感じとった璃玖は、遠慮がちに声をかけた。

「璃玖アンタ…何で泣いてるわけ？」

殺気すら感じさせるような、低い声。

まずい、と思ったときにはもう手遅れだった。

目を見張るような素早い動きで、水未は少年の腕をつかみ上げた。

少年は突然のことにもかかわらず落ち着いた様子で、ひねりをかわして逆に水未の手首をとった。

「このクソガキ！璃玖に何した？」

「…あんたは…」

「何したって聞いてんだよ、何で璃玖が泣いてんの！？」

容赦なく攻撃を仕掛ける水未に、少年もまた巧みにそれをかわした。

「水未待つて、落ち着いて！私は大丈夫だから」

璃玖の言葉が届いたのか、水未はいったん攻撃の手を止めた。ただし警戒心丸出しの目は、少年から動かさないまま。

「本当に大丈夫だから。この人は悪くないよ」

頬に伝っていた涙を手の甲で拭い、璃玖は水未に笑みを見せた。

「本当に…何かされたりしてない？触られたのが嫌だったとかじゃない？」

「うん。泣いた理由は、この子とは関係ないよ。触られたのも、大丈夫だったみたい。自分でも不思議なくらい」

「…そっか、なら良かった」

安堵したようにため息をついて、今度は先生の方へと鋭い視線を

送った。

「センサー、説明してよ」

「わかった、わかったから。睨むのはやめよう、ね？」

なだめるような口調の先生に対しても、水末の機嫌は一向に良くならなかった。

諦めたのか、先生は観念したように話しはじめた。

「…彼は若松瀬名くん。この学園の生徒で、璃玖ちゃんのルームメイトだよ」

先生の言葉に水末は数回まばたきをくり返し、疑わしげに眉をひそめた。

「何の冗談？」

「璃玖ちゃんも水末ちゃんも、その反応はひどいなあ。もっと僕を信用しようよ？」

「日ごろの行いがものを言うんだよ」

水末の手厳しい一言が飛んで、先生は困ったように眉尻を下げた。

コンコン

ノックの音がして、ドアが開け放たれた。



立っていたのは眼鏡をかけた女性教員で、少年の姿を見つけるなり険しい表情になった。

「…若松くん！」

「あれ、<sup>ハスミ</sup>蓮見先生」

「あれ、じゃありませんよ、神崎先生。どこを探してもいないと思つたら…いきなりいなくなつたりして、どう言つつもり？」

「……」

「すみません、すぐに戻らせます。ほら、若松くん」

神崎先生に軽く背中を押され、少年は露骨に嫌な顔をしてみせた。先生はそんな少年を気にも止めず、半ば追い出すように少年と女性教師を入り口まで見送つた。

「…ちよつと、アンタ！」

立ち去ろうとする少年の背中に、水末は何を思つたのか突然声をかける。

緩慢な動きで振り向いた少年は、水末の瞳を真つすぐに見つめかえした。

「璃玖は大の男嫌いなんだよ。下手に近づいたりしたら許さないから。覚えとけよ」

水末の刺すような視線や言葉にも、少年はまったく動じなかった。

「…ああ、覚えておく」

短くそれだけ答えて、何事もなかったように歩き始める。しかし何歩か歩いたところで再び足を止めて、顔だけで水未を振り返った。

「記憶をどうした？…水姫」

璃玖は目を見張った。少年の口元が、弧を描いたように見えた。

「みずひめ…？」

少年の口からこぼれた聞き慣れない言葉に、璃玖は聞き返すようにその言葉を呟いていた。

「…璃玖」

「なに？」

「アイツには、極力かわらないほうがいい」

「水未、何言ってるの…」

「…ごめん、何でもない。変なこと言ったね、気にしないで」

水未は何かを吹っ切るように言って、それ以上話を続けることはしなかった。

「水未ちゃんに、璃玖ちゃん」

先生はにっこりと笑みを浮かべて立っていた。

「授業、始まつてるんじゃないかな？」

「…あ」

「やばっ！」

その後二人は、大慌てで教室へ戻ったものの授業には当然遅刻をし、担当教員からの長い説教を受けるはめになったのだった。

十

一日のすべての授業を終えて、遅刻のペナルティーとしての居残り学習をさせられたのち、璃玖たちはやっと帰路につくことができた。

いつもどおりエレベーターで水未と別れ、璃玖はさらに上の階まであがる。疲れ切った体を引きずるように歩いて、自分の部屋の近くまでたどり着いたとき、璃玖は足を止めた。

「……」

「おい！そっちの荷物も、早く搬入して」

たくましい筋肉を兼ね備えたバリバリの業者さんたちが、他でもない、璃玖の部屋を行き来していた。

「あ、あの…？」

作業中の人々に指示を出している、リーダーと思われる男に、璃玖はおそろおそろ声をかけた。

いかつい筋肉マンが、ちらりとこちらを向く。

「あれ、もしかしてこの部屋の？」

「この部屋の寮生なんですけど…」

答えるなり、彼の太い両眉が鋭角に釣り上げられた。尋常じゃない顔つきに璃玖の恐怖指数が一気に跳ね上がる。

お取り込み中なら出なおしますと意味不明な言葉をくちばしりそうになって、あわてて飲み込む。混乱しまくりの璃玖のとなりで、彼は思い切り息を吸い込むなり作業員たちに鋭い怒声を浴びせかけた。

「ゴルアアお前等！部屋の嬢さんが帰ってきちまったじゃねえかアアア！！」

「ハイ！すんません！」

「いつまでもトロトロやってんじゃねえよオラ、根性見せやがれ根性！」

「オーッス！！」

複数の男たちの叫び声が重なり、壁や床が震えた。

筋肉隆々の男たちはそれまでよりもさらに機敏に動き回り、廊下に積まれていた家具や荷物をあつという間に部屋の中へと運び込んでしまった。

「嬢さん悪いね、待たせつちまって。さあさ、寒いだろう。中へ入った入った」

追いやられるように部屋へと押し込まれて、筋肉マンは体系にそぐわないさわやかな笑みを浮かべた。

「では、俺たちはこれで。失礼しました」

「は、はあ…」

去っていく筋肉マンたちの背中を、璃玖は立ちすくんだまま見送ったのだった。

ドアを閉めて部屋に入ると、それまでは空き部屋となっていた場所に生活スペースが出来上がっていた。

おそらく、あの少年の生活の場となるのだろう。運び込まれた荷物は整理されていて生活感がく、すべて新しいものなのだろうと璃玖は思った。

「…璃央！」

「ニャー」

部屋のすみに丸くなっていた愛猫の姿を見つけて、璃玖はかけよってくる璃央の体を抱き上げた。

「大丈夫だった？怖かったよね璃央」

「ニヤア」

「…これから、どうなっちゃうんだろうね」

璃央の震える背中を撫でながら、璃玖は小さくため息をついた。

再び、保健室へ・・・END

## 一章 第二夜、始まりの日

十

『おいコラ！早くここから出しやがれ！』

テーブルの上でガタガタ音を立ててゆれるガラス瓶をつまみ上げて、彼は鬱陶しげに目を細めた。

『このオレ様をこんな狭苦しい入れものに押し込めるなんて、このクソガキ！お前あとで痛い目見るからな！』

「…召喚魔の分際で、こざかしい。瓶詰にして正解だったな」

意図的なのかそうでないのか、嘲るように笑う少年に彼は腸が煮え繰り返るような怒りを覚えた。

狭く不自由な瓶の内側で、怒りにまかせて青い炎を燃え上がらせれば、少年は愉しげに目を細めた。

「遊魂<sup>ユウコン</sup>…、か。中々愉しませてくれそうだな」

不気味なほどに嬉々とした笑みに、彼は悪寒すらも覚えた。

「ちょっとしたお遊びだよ。簡単な頼みごとを一つだけ、聞くだけでいい」

『な…なんだよ』

瓶のなかで思わず身構える彼を見下ろして、不気味な笑みをさらに広げた少年は言った。

「裏切り者に、制裁を」

『はあ？』

「手段は問わない。ただ、お前ら遊魂としての能力を使って、暴れればいいだけさ」

『…要するに、誰かを襲うんだな？まかせとけ。で、誰なんだよ、その裏切り者って』

「…ルヴィアン・セナ。我が崇高なる一族から生まれた、汚れた人間」

『言っておくけどな、命の保障はないからな』

「構わないさ。生かすも殺すも、お前次第」

瓶の中で揺らめく炎を眺めながら、少年は満足そうに微笑んだ。

十

嫌な夢を見た。

誰かが、死んでしまう夢。車にひかれて、命を落としてしまう夢だった。



それは目の前で起こった出来事のはずなのに、どこか別の世界で  
ある気がして。助けなければと思っても、それができなかった。

足が動かなかった。

ただ見ていることしか、できなかった。

なぜだろう。

地面に広がる紅い鮮血が、網膜に焼き付いてはなれないのは。

「  
っ！」

勢い良く起き上がってみると、そこはいつもの部屋だった。  
横たわる人影も、流れる血もない。

「  
……………」

額から流れる汗。ドクドクと波打つ自分の心音が、耳に痛かった。

「ニャー」

放り出した掛け布団がもぞもぞと動いて、中から璃央が顔をのぞかせた。璃玖は布団にうもれた飼い猫を、あわてて抱き上げる。

「…ごめん、つぶしちゃったね。おはようリオ」

そういつて頭を撫でてやれば、璃央は満足そうに喉をならしたのだった。

着替えを済ませて、璃玖は音を立てないように自室のドアを開いた。リビングからキッチンへと視線を走らせ、誰もいないことを確認する。

「…よし、おいで璃央」

冷蔵庫からミルクを取り出し、シリアルを入れた容器にそそいだ。それを璃央の前に出してやれば、璃央はニャアとひと鳴きして、おいしそうに食べはじめた。

「…飼い猫がいることは知ってるのに、いまさら何をこそこそする必要がある？」

「…！…若松くん」

背後からの声に振り返れば、そこにはルームメイトである少年の姿があった。

「おはよ…は、早いね」

居心地の悪さをごまかしたくて、それとなく会話をする。

「無理しなくていい。別に、アンタと関わるつもりもない」

「……………」

関わるつもりもないのに話し掛けてくるなんて、矛盾してる。もちろんそんなことを言葉に出す勇氣など、璃玖にはなかった。

男の人が苦手なのは、今も変わらない。関わりたくもないし、言葉を交わすことすら望んでいない。

けれど彼には、璃玖にはとうてい理解できない深い闇があるような気がして。璃玖は小さく息をついた。

「リオ、ちゃんと残さず食べてね」

そう言い残して、璃玖は洗面所へとむかった。

顔を洗い終えて食堂へ行けば、いつものようにたくさんの生徒がいて賑やかだった。日当たりのいい窓側の席に、水末の姿を探す。

「璃玖、おはよ！」

水末はいつものように、璃玖よりも早く席についていて、璃玖にむかって手をふっていた。

「どう？ルームメイトとの生活」

席に着くなり、水未は心なしか楽しそうに話してきた。

「ひど、他人事だと思って」

「だってさ、泣きながら電話かけてきたんだもん。ビックリしたんだよ？たくさん荷物が運ばれてきて、今日から同室で寮暮らしだってでも何かそのうち…おかしくなってきたやつて」

くすくすと声を押さえて笑う水未に、璃玖は不機嫌に頬をふくらませた。

「ごめん、怒るなって。それでも悪い人ではないからって言ったの、璃玖だよ？」

「…何を根拠に言ったのか、自分でもわかんないけど」

「璃央もいるし、我慢できるって言ったじゃん」

「…弱みを握られているとも言えるよね」

「嫌になったら、いつでもアタシの部屋おいで、添い寝してあげる」

「わ、やった」

「バカ、喜ぶな」

水未に乱暴に頭を撫でられ、せっかくセットした髪がぐちゃぐちゃになってしまった。

気のない謝罪とともに渡された小さなコーム片手に、璃玖はトイ

レまで鏡を求めて走るはめになったのだった。

十

日直といえば、その日一日を先生から言い渡される仕事をすべてこなさなければならぬ、言わば雑用係である。

「日直だなんて聞いてない…ショック」

「仕方ないじゃん、璃玖の前に日直やるはずだった津田さん、体調不良で休みだったんだから」

「知ってるよ！知ってるから、そう何度も言わないで悲しくなる…」

「そー落ち込むなって、今日一日ひたすら雑用こなすだけじゃん？」

「嫌味にしか聞こえない」

「嫌味だもん」

「サイテー」

「結構、結構」

すっかり楽しんでいる様子の水未に璃玖は恨めしげな視線を投げ付けながら、ため息をついた。

「水未に一つお願いが」

「日直代われってのはナシ」

「水末じゃないもん、そんなこと言わないよ。遅くなるって思わなかったから、璃央のご飯用意してこなかったの。あげておいてもらっていい？」

「あいよ、了解。ほいじゃ日直頑張んなよ」

「他人事だなあ」

「他人事だもん」

その後、朝のホームルーム終了から早々に仕事を言い渡されて、璃玖の哀れな日直の一日が始まったのだった。

「先生つてば、人使いが荒すぎる…」

両手いっぱい重いプリント資料を抱えて、璃玖は本日二度目となる職員室から資料室までの廊下を歩いていた。

「こんなんじゃ、授業間に合わないよ…」

文句をこぼしつつも、与えられた仕事を終えずに戻るわけにもいかず。ひたすら運ぶしかなかった。

「……あ」

資料を置き開けっぱなしのドアに目を向けると、何の偶然だろうか、できれば会いたくないと思っている人物がそこにいた。

「若松、くん」

思わず名前を呼んでしまったものの掛ける言葉もなく、妙な沈黙が二人を包む。

彼もまた資料を抱えていて、どこか面倒臭そうにそれを棚に収めていた。

「……」

気まずさも限界に達して、璃玖はそのまま逃げるように彼に背を向けた。教室を出ようと早足でドアへと向かう。

あと一歩踏み出せば廊下に出られる、その時だった。触れてもいないのにドアはピシヤリと音を立てて閉められてしまった。

「……！ な、なに」

『見いーつけた』

「……伏せろ……！」

璃玖は、茫然と立ち尽くしたまま。獣の咆哮を聞いた気がした。

．．．NEXT．

## 始まりの日〔2〕

「　　っ！」

彼の鋭い声を聞いたのと同時、璃玖は教室の全ての窓ガラスがドーム状に膨れ上がるのを見た。

壁に体を叩きつけられ意識を飛ばしかけた璃玖だったが、何とかつなぎ止めて薄く目を開いた。何やら白いベールのようなものが視界を覆っていて、それはまるで璃玖たちを守るかのように淡い光を放っていた。

「けほっ…痛、あ」

壁に強<sup>シタタ</sup>か背中を打ち付けたようで一瞬息詰まり、激しく咳き込んだ。

宙にむかつて伸びていた少年の手のひらが、ゆつくりと下げられた。すると覆っていたベールが消え、ガラスの破片と思しきものが消えたベールに沿って滑るように床に降り積もった。

「……………」

もしあの白い靄が璃玖を覆っていなかったら。考えるだけで背筋が凍りついてしまいそうだった。

「立てるか」

「何、今の…」



「説明してる暇はない、こいつの始末が先だ」

「こいつ、って」

「ポルターガイストという言葉、聞いたことがあるだろう」

ポルターガイスト現象は、手足のない物が勝手に浮遊したりする不可解な現象のことである。霊的な現象であると耳にしたことはあったが、実際に目の当たりにしたことはなかった。

「…厄介だな」

「え…？」

「これから良いと言うまで、絶対に動くなよ」

「何で、何するの…」

全て言い終えないうちに、璃玖の額に冷たいが指先が触れた。

「あ…っ」

あの時と、まったく同じ感覚。雨の降りしきるあの路地で、神崎先生にかけられた不可思議な術。

ただ一つあの時と違うのは、意識が保たれているということ。青白い光とともに現われた“何か”は、璃玖の瞳に鮮明に映っていた。

「…！」

狐だと、璃玖は思った。しかし本物の狐ではないことは一目瞭然だった。尻尾が三本も生えているし、胴体から後ろ足にかけては、まるで空気に混ざるようにして消え入っていた。

宙に浮きながら璃玖を見下ろす鋭い眼光は、間違いなく狐を思わせるものだった。

『ルヴィアン・セナって、お前のことだろ？…なるほどな、裏切り者ってのはそういうことか』

あざけるような笑みを浮かべる青い狐に、少年はわずかに眉をひそめた。

「遊魂が、何の用だ」

『頼まれたんだ。血を裏切ったお前を、襲えつてさ』

「誰の差し金だ」

『知らないね。オレを呼び出したのが誰かなんて、興味もない』

「…大体の見当は付いているが」

浅くため息をつくとき、瀬名は床に散乱したゴミの中から、空のペットボトルを拾い上げた。

「理由なんか、無に等しいだろうけどな」

瀬名の右手が素早く動いて、狐に向けられる。

『無駄な足掻き、オレはそう簡単にやられねえよ』

声と同時に、狐は激しい炎に包まれた。それは辺りに火の粉を撒き散らすようにしながら燃えさかり、立ちほだかる瀬名に襲いかかった。

「……っ」

危ないと叫んだつもりが声にはならず、かすれた息が喉を通っただけだった。瀬名は態勢を崩したのか、床に手について攻撃をかわした。

『何だよ、吸血種族ってのはこんなもんか？』

嘲笑いながらの襲撃に、瀬名は同じように攻撃をかわすだけだった。

このままでは、ただ一方的にやられるだけになってしまう。璃玖にはただ不安だけがつのっていた。

「 召喚」

それはとても短く、場に似合わないくらい冷静な声だった。声と同時に、瀬名の指先が触れる床には複雑な模様が浮かび上がり、璃玖は息をのんだ。

模様の上には光とともに白い何かが現われて、鋭い両眼を狐に向けた。

『狼の召喚魔、か。やるなあ、あんたも』

「遊びは終わりだ」

白い狼は、ものすごいスピードで遊魂に向かって突進した。遊魂に正面からぶつかると思われた瞬間、狼の姿は消え入るように空中で霧散した。

『ふん、逃げ出したか？』

空気が止まった。

「ザコが」

『…うわっ…何すんだコノヤロツ…』

突然遊魂が、何かから逃れようとしているかのように藻掻モガきはじめた。何が起こったのかわからず、璃玖はその様子をただ茫然と眺めているしかなかった。

苦しみに表情を歪める遊魂の身体のまわりを、白い粒子が渦を巻いて漂いはじめた。それが一体何なのか、璃玖はわかったような気がした。

「うせろ、遊魂」

『く…そっ！』

狼にがんじがらめにされた遊魂は逃れるすべもなく、瀬名の片手にあるペットボトルにあつという間に吸い込まれてしまった。

ボトルのキャップをしめた瀬名の指先が、今度はパチンと音を鳴

らした。それを合図に璃玖の金縛りがとけて、璃玖は異常に乱れた呼吸に咳き込んでしまった。

「怪我は」

「へい、き」

息絶え絶えの璃玖は、それだけ答えるのもやっとだった。

「教室、ぐちゃぐちゃ…」

窓ガラスは割れて床に破片が散乱し、机や椅子は吹き飛ばされたように壁ぎわへと押しやられていた。到底二人で片付け切れる状態ではなかった。

「うわー、大惨事だねコレは」

音もなく、いつのまにか現われた神崎先生が、気の抜けた声を上げて苦笑した。

「セナの結界のおかげで、被害は教室だけに止めたみたいだけど」

「神崎、先生…」

「大丈夫、何が起こったのかは大体把握してるよ。それで？やったの？」

「…仮詰めだ」

瀬名はペットボトルに収められた青い光を、先生の目線の高さま

で持ち上げる。

「君が封印する？僕がやっておいてもいいけど」

「いや、いい。始末は自分でつける」

「…セナ」

静かな声で名を呼ばれて、歩きだしていた瀬名は足を止めた。

「その召喚魔は、主人の言い付けにしたがって動いただけだと思うけど？」

向けられていた背中が動いて、こちらに視線が向いた。

「……だからどうした？」

表情には、何の感情もなかった。悪寒が、全身を駆けぬける。体が動いてしまったのは、まったくの無意識だった。

「待つて！」

震える足で、力をふりしぼって立ち上がった。嫌な予感がしていた。それだけは絶対に、ダメだと思った。

「殺したり、しないよね？」

彼の鋭い視線が、恐ろしくてたまらなかった。  
けれどやはり、見え隠れするのは深い闇　深い悲しみ。

「ダメだよ……」

そんなに悲しい顔をしながら、何かを殺める<sup>アヤ</sup>なんて。  
瞬間、彼の瞳に怒りが燃えた。首を掴まれ壁に押しつけられて、  
頭を強く打った。

「お前に何がわかる？」

痛みと苦しみと、彼の悲しみが、同時にあふれて流れ込んでくる。

「セナ、手を放すんだ」

手の力が強まって、意識も朦朧としてくる。苦しい、そして悲しい。

「セナ！」

「闇を知らないお前に、何がわかる ……」

言葉の途中で、璃玖の意識は途絶えた。  
死ぬのかもしれないと思った。彼にあんな顔をさせたまま、二度  
と会うことは無いのか、と。

それが何よりも、悲しくてしかたがなかった。

十

僕の主人。

それはとても大切な人で、たとえ自分の身を犠牲にしても、守ろうと決めた人。

そう、何度でも。

(…璃玖?)

嫌な予感はしていた。あの日、あの出来事をこの目で見てしまったときから。

あれは、まるで呼ばれているような感覚だった。恐ろしいほどの負の気配、自分の力ではどうにもならないと、半ばわかっていたのかもしれない。

けれど、見過ごすわけには行かなかった。

大切な人にこれから降り掛かってくるであろう、たくさんの災難に、僕は気付いていたのだから。

(リク…っ！)

無我夢中で部屋を飛び出し、人目もはばからずにただ走った。不思議そうにこちらを見る人の姿もあったが、気にも止めなかった。

生け垣を飛び越えれば、目的とすべき場所はすぐにわかった。彼らとは別に、かすかだが何かの気配も感じた。

二階だったが階段は使わず、高さのある木にかけのぼって、くだけ散って枠だけになった窓から飛び込んだ。

「…ニヤア」



璃玖は、無事だろうか。

始まりの日・・・END

## 始まりの日〔3〕

十

「……璃玖に、何したの？」

「主人の危機を感じたか…随分と忠実な飼い猫だな」

皮肉るように言つて、瀬名は対峙する青年を見据えた。人型をとつた彼は瀬名よりもいくぶんか背が高く、目の位置からすると相手からは見下ろされている状態になる。

何となく、氣に食わないと瀬名は思った。

「璃央くん、だよね？…安心して、僕らは彼女を傷つけるつもりはないから」

「ボクは、あなたたちを信じてなんかない。璃玖に危害を及ぼすものに、容赦はしない」

彼は紫苑に抱かれて目を閉じたままの璃玖に視線をうつすと、あからさまな敵意を瀬名に向けた。

「首にあざがある。氣を失っているのは君のせい？」

瀬名は彼の瞳に怒りが宿つたのを見た。答えを聞くよりも早く、彼は瀬名に向かって攻撃を仕掛けてきた。

「ちょ、セナ！璃央くん！」

紫苑の声も、瀬名や璃央の耳には届かなかった。互いに敵意をむき出しにして睨み合い、攻撃を仕掛けては避けてを繰り返していた。

「…っ…ん…」

声に反応したのか、紫苑の腕に抱えられていた彼女が小さく身じろぎした。

「あ…璃玖ちゃん？」

自らの名前を呼ばれて、彼女は意識を取り戻した。

「…！…璃玖」

青年はそう呟くと、黒い猫へとその姿をかえた。

+

誰かが呼んだ璃央という名に、璃玖は真っ暗だった視界に光を取り戻したような気がした。

「…っ…り、お？」

「璃玖ちゃん、大丈夫？」

「神崎せんせ…どうして、私…」

思考回路がはつきりしないまま、璃玖は目だけを動かして辺りを眺めた。

吹き飛んだ資料、倒れた棚。割れた窓ガラス、こちらを見つめる黒い猫。

「…璃央」

「ニャア」

「何で璃央がここに」

ふらつきながらも自力で起き上がって、飼い猫の体に触れる。

「璃央、一体どうやって部屋から出たの…？」

「璃玖ちゃん、とりあえず話はあと。誰かに見つからないうちに教室を修復しないと。立てる？」

促されるまま、疑問を一旦頭から振り切って、璃玖は璃央を抱いて立ち上がった。

「璃玖ちゃんとセナ、それに璃央君は、保健室へ向かうんだ。ここの後始末は僕に任せて」

先生は指をぱちん、パチンと数回鳴らした。倒れた棚は起き上がり、割れた窓ガラスはひとりでに窓枠へと集まっていき、元どおりになった。

「ニャー」

不思議な光景に思わず見入ってしまった璃玖だったが、璃央の声に急かされるようにして教室をあとにしたのだった。

璃玖たちが保健室にたどり着いて数分も経たないうちに、神崎先生は保健室へとやってきた。

わが身に降り掛かった、普通では信じがたい出来事に、璃玖はすっかり疲れ切ってしまったていた。

「璃玖ちゃん。こっちへきて、首を見せてごらん」

促されるまま診察台に腰掛けると、先生は璃玖の首筋に触れた。瞬間、鈍い痛みが走って、思わず息を止めた。

「アザになってる。すぐに手当てするからね」

手当てを始めてから終えるまで、璃玖はほとんど痛みを感じなかった。手際の良さに、思わず感心せずにはいられなかった。

「…はい、終わり」

「ありがとうございました」

「さて、セナ。君にもすべきことがあるんじゃないかな？」

保健室に来てから終始無言だった少年は、変わらず黙ったまま。先生の言葉にも、窓の外を眺めたまま振り向くことさえしなかった。

「セナ」

二度目の呼び掛けに、少年は顔だけ動かして先生を見た。

「それは僕が処理するよ」

「勝手にしろ」

短い会話の後、少年は先生に向かってペットボトルを投げた。なかで青い炎が揺らめいて、淡い光を放っていた。

「ごめんね、璃玖ちゃん」

「……？」

「セナの分も、謝っておかなきゃって思ってた」

確かに、璃玖を傷つけたのは瀬名だった。しかしそれ以上に、瀬名は璃玖の命を救ってくれた。

「私はただ、助けられただけです」

何の返答にもならない言葉。しかし先生は、どこか安心したように笑った。

「遊魂の説明を、璃玖ちゃんにもすべきかな」

「ゆうこん、さっきのポルターガイスト？」

「遊ぶ魂と書いて遊魂。本来名前のとおり、自由に気ままな魔物なんだ。守護霊なんかとは違って、主人もなく、縛られるものが何もない。けど、彼は違ったみたいだね」

先生は光を放つペットボトルを、璃玖の顔の位置まであげた。青い光はどこか神秘的で、璃玖はしばらく眺めていた。

『……居心地が悪い』

どこか拗ねたような声が聞こえたかと思えば、青い光が瞬間的に強く輝いた。眩しさに目を閉じて、次にその目を開いたとき、璃玖は小さく声を上げた。

「あ……！」

先程までは淡く光を放っていただけだったペットボトルの中に、窮屈そうに身を縮める小さな生きものがあらわれた。

襲われたときの恐ろしい形相からは想像もつかないくらいに小さく愛らしいその姿に、璃玖は穴が開くほどペットボトルを見つめてしまっていた。

『ナメた真似しやがって。おいそのクソガキ！さつさとオレをここから出しやがれ！』

可愛らしい見た目とその口から出る罵声が、あまりにも不相応だった。喚く遊魂に瀬名は一瞥をくると、不機嫌そうなオーラをにじませながら保健室を出ていったのだった。

『けっ、逃げやがったぜ。あの腰抜け野郎』

「…君ねえ、あんまりセナを挑発しないほうがいい。今殺されなかったのはラッキーだったよ、本当に」

呆れ顔で言いながら、先生はため息と一緒にペットボトルを机に置いた。

『知るか。何でもいいけどな、早く出さなねえと痛い目見るぜ』

「セナの力に負けてその中に閉じ込められたんでしょ？」

『うるせーっ！それ以上言うと、本当に容赦しないからな！』

喚いては狂暴に牙を剥いてみせる遊魂だったが、今は何をされても恐怖を感じなかった。恐怖という負の感情よりも、込み上げてくる別の感情があった。

「かわいい…」

『え』

「え」

璃玖の言葉に、先生と遊魂は口をポカンと開けて固まるというまったく同じ反応をみせた。

「小さい狐なんて、私、初めて見ました！」

璃玖の心は、もうすっかり小さな狐の姿をした遊魂に夢中だった。口調はどこか興奮気味で、瞳も輝いて見えるほど。



「私、動物が大好きで」

『お前な、オレ様は遊魂だ。単なる動物なんかと一緒に…』

「キミ、名前は？どこからきたの？」

『おいコラ待て、話を聞け！』

「先生、この子私にくれませんか？」

『何言ってるんだ、オレは物じゃ…』

「全然構わないよ」

『待てつつつてんだろー！』

遊魂が喚いて暴れるせいで、ペットボトルは終始カタカタとゆれて音を立てていた。璃玖と先生の会話は、お構いなしにすすんでいく。

「遊魂を支配するためには、名前を付ける必要があるんだけど…主人は璃玖ちゃんだから、璃玖ちゃんが決めるんだ」

「支配？」

遊魂は璃玖の言葉と同時にぴたりと動きを止めた。表情が凍り付き、絶望さえうかがえた。

『わあああっ！嫌だからな、支配だけは嫌だーっ！』

遊魂は、さつきよりも一層声を張って暴れ始めた。動きに耐えられなくなったペットボトルが、倒れて机の上を転がった。

「いや、私、支配とかそういうつもりじゃなくて…」

倒れたペットボトルを手にとって、怯えるように震える遊魂に、璃玖は笑いかけた。

「ごめんね。ただ、話をしてみたかっただけなんだけど」

かすかに震えていた遊魂の表情から、怯えの色が消えた。

「キミは悪い子じゃないって、思ったから…仲良くなれたら楽しいかなって」

自由を奪うつもりなんてなかった。興味本位の思い付きでも、物珍しいからでもなく。

「…誰かを傷つけてしまったほうだって、つらくて悲しいんだよね？」

それがたとえ、人間ではない生きものだとしても。

「…さて。じゃあここからは、遊魂である君の意志を尊重しよう。璃玖ちゃん、それでいい？」

「もちろん、決めるのは私じゃないことくらいわかってます。自由あつての遊魂、ですよ」

璃玖の言葉に先生は頷いて、ペットボトルの蓋を開けた。

保健室全体に行き渡るほどの光を放ちながら、遊魂は再びその悠悠とした姿を現わした。

『お前バカだろ。出されたら逃げるに決まってるんだろ！』

「うん、止める気はないよ。ただ一つ約束してくれる？もう、何かを傷つけることはしないでね」

『………知るか、バーカ！』

遊魂は悪態を吐きながら、空中で霧散して姿を消したのだった。

始まりの日・・・END

## 四季折々

小鳥のさえずり、窓から差し込む太陽の光。

「…ん…」

眩しさに眉をしかめ、璃玖はベッドの上で寝返りをうった。

『ぐえっ！』

「わっ！」

ふにやりとした柔らかい感覚を背中に感じたかと思えば、苦しそうなうめき声が背中の下から聞こえてきた。

眠気も吹っ飛んで、璃玖は布団を投げ出して飛び起きた。

「…何、今の…」

あわててベッドや背中を確認するも、変わった様子は何一つなかった。

「…夢？」

『…夢じゃねえよ！』

投げ飛ばした布団の下から、くぐもった声が聞こえてきた。璃玖は何事かと、恐怖で全身を硬直させた。

『だあああつ！早くここから出せー！』

「その声もしかして…遊魂の狐さん？」

言っではみたものの返事はなく。布団だけがもぞもぞと動いているという、何とも奇妙な光景だった。

半信半疑のまま、璃玖は床に落ちた布団をめくり上げようと手を伸ばした。

『ケイタイヘンゲ  
…形体変化！』

「…っ！」

呪文のような言葉と同時に、軽い破裂音、そして薄青い光が放たれた。

「ふー…。始めっからこうしてりゃあ良かったぜ」

「何、いきなり…」

音や光とともに、床に落ちた布団は再びベッドのうえに戻っていて、璃玖の体を頭からすっぽりと覆っていた。かぶった布団を、体から除ける。

「…よっ、昨日ぶり」

薄茶色の髪、薄茶色の瞳。

布団から脱出した璃玖がまず見たものは、見知らぬ少年の姿だった。

「……い」

「……い？」

「いやああああっ！！！」

絶叫、錯乱。

璃玖は脇目も振らずに部屋を飛びだした。

見知らぬ人間が、部屋にいた。招いてもいない、知り合いでもない、男。

「嫌っ……いやあああっ！」

リビングまで走って、部屋から一番離れた壁にもたれかかった。足がふるえ、言うことを聞かない。

「ちょっとお前なあ！人の顔見ていきなり悲鳴上げるなあ、失礼だろ！」

乱暴に部屋のドアを開けてリビングに現われた少年。不機嫌そうに言葉をはいて、璃玖を睨み付けてきた。

「……やつ！」

壁に寄り掛かったまま、璃玖は床にへたりこんだ。

「……朝から騒がしい、アンタら」

感情のない声。璃玖は涙目のまま声の主を見上げる。自室から出てきたルームメイトの少年は、不機嫌そうに様子を眺めていた。

「遊魂。姿を変えろ、ややこしくなる」

「はあ？何でお前に指図されなきゃなんねえんだよ」

「出来ないなら、手伝ってやってもいい」

「……………」

瀬名は、物凄くドス黒いオーラを全身にまとっていた。見るも無残な姿にされかねないと判断したのか、見知らぬ少年は再び呪文を唱えた。

破裂音、青い光。

そこにいたのは、昨日解放されたはずの狐の遊魂だった。

「狐さん……」

現われた狐の姿に、璃玖はやっとのことで恐怖から解放された。

『何だよ、全く。朝っぱらから悲鳴上げられて逃げ惑われて、気分悪いぜ』

「ごめん、その…苦手、なの。男の人が」

声のトーンを落として言うと、遊魂は小さな顔いっぱい疑問の表情を浮かべた。

『はあ？』

「でも動物は好きだから、大丈夫」

『いや何がだよ』

「おい」

冷たい声が、会話を止めた。

「何しに来た、遊魂」

『そんなこと、お前に関係ねーだろ』

「今度は誰の指示を受けてきた？」

『誰の命令もない、自分の意志だ』

「…見え透いた嘘だな」

『…いけ好かねえガキ』

今にも戦いが始まってしまつのではないかと思えるほど、緊迫した雰囲気だった。

「あの、若松くん」

二人の間にただよう不穏な空気を払拭したくて、璃玖は口を開いた。

「この子はもう、誰かを傷つけたりはしないと思う。約束してくれ



たから」

「…約束？」

『おいコラ。いつ誰が約束したって？オレは頷いた覚えはないね』

「でも、否定もしなかったよ。そうでしょ？」

問い掛けると、遊魂は居心地悪そうに視線を泳がせた。

『…チツ。いまさら、テメエの命なんかに興味ねえよ』

渋々といった様子で吐き捨てられた言葉だったが、璃玖にはそれが約束を肯定してくれたのだと思えた。

瀬名はしばらく半眼で遊魂を睨みつけていたが、やがてその場を去って行った。

「ところで、何か用があつてきたの？狐さん」

『…暇つぶしに、アンタと遊んでやってもいいかなって思ったんだ  
『よ

「え、本当に？」

『男に二言はねーよ』

愛らしい狐の姿で男を語る遊魂に、璃玖は小さく吹き出した。

「よろしく、狐さん」

『狐じゃねえよ』

遊魂はどこか不貞腐れたように、視線をそらす。

『…シキ。オレの名前』

その行動が照れ隠しなのだと気付いて、璃玖は笑みを浮かべた。

十

朝イチのハプニングで大幅に時間をロスしてしまった璃玖は、朝食を食べる間もなく学校へと走った。

なんとか遅刻を免れた璃玖を出迎えたのは、鬼のような形相をした水未だった。

「…ごめんなさい」

昨日から今日の朝までに起きたことを、当たり障りない範囲で（内容のほとんどが嘘であったが）説明をした。頭を下げて謝ると、水未は短くため息をついた。

「まったく。体調不良で早退したっていうから、部屋に行ってみたら誰もいないし。仲良いからって日直の仕事は任されるわ、連絡はつかないから心配するわ、最悪だよもう」

「すみません…本当に」

昨日の出来事で、ポケットに入れていた璃玖の携帯は壊れて使えなくなってしまうていた。

気付いたときには修理に出すには遅い時間で、璃玖は一晩連絡手段を断たれてしまったのだった。

「次の日直、あたしのかわりに璃玖がやってよね」

「それはもちろん。迷惑かけてごめんね、携帯の修理も今日頼んでくるつもり」

「…それはいいんだけど、コレ何？」

「コレ、って？」

「コレ」

水未が指差したのは、璃玖の膝のうえ。白くて小さなものが、もぞもぞと動いていた。

「…シキ！」

「なん…」

喋ろうとしたシキの口を、璃玖は慌ててふさいだ。

「アンタまた変なもの拾って、懲りないやつ」

「だってホラ、かわいいでしょ？」

「昔から変わんないよね。生きものを拾っては、こっそり隠れて飼

ったりしてさ。犬に猫、リスにスズメにイタチにイグアナにヘビ…」

「イグアナにヘビなんて、拾ってないよ」

「今度は何それ、白いタワシ？」

『なっ…むぐ！』

食って掛かりそうになったシキを、璃玖は必死で押さえ込んだ。

「今、ソレ喋った？」

「えっ？違うよ、鳴き声だよ。めずらしいから、拾っちゃったんだよ」

シキは口を塞がれたままジタバタと暴れた。これ以上暴れられると手に負えなくなると思い、璃玖はとりあえず、席を離れることにした。

「ごめん、この子お腹すいちゃったみたい。ちょっと行ってくるね」

「何でもいいけど、バレないようにしなよ。仮にも学校なんだから。あと、一限始まるまでには戻りな」

「うん、ありがと水未」

シキを制服の中に押し込んで隠し、璃玖は早足で教室を出た。

「…それで、僕に遊魂…シキを預かってほしいと？」

璃玖が教室を出て向かったのは、神崎先生のいる保健室だった。  
不本意なことこの上なかったが、事情を知る彼にしか頼めなかった  
め仕方がない。

「す、すみません。気付かずに付いてきちゃったみたいで…」

『何か慌てて出ていったからさ。暇つぶしに来てみたんだ』

「もう…学校まで来られても、構ってあげられないよ」

『べっ、別にかまってほしいわけじゃないからな！』

「他に頼める人なんていなくて…お願いします」

『話聞けよ！』

頭を下げて頼む璃玖に、先生は少し困った顔をしながらも了解してくれた。

「わかった、放課後まで預かるよ。こうお喋りだと、璃玖ちゃんも面倒見きれないだろうしね」

「ありがとうございます！良かったね、シキ」

『良くねえよ！ちえっ、勝手に決めやがって』

不機嫌に言葉を吐いたシキだったが、それ以上何も言わなかった。

「お願いします。昼休みにまた来ます、失礼しました！」

一息で言葉を並べて、頭を下げる。

一限開始も間近に迫っていたため、急いで保健室をあとにしたのだった。

十

「まったく、ダメじゃないか。学校まで付いてきて、璃玖ちゃんを困らせたりしちゃ」

お茶菓子用のクッキーを出してやれば、そこそこ気に入ったのか遊魂はしばらく大人しくクッキーをかじっていた。

からかいのつもりで言った言葉に、遊魂は予想どおりいやな顔をした。

『何だよ。何をしようがオレの勝手だろ』

「これからも璃玖ちゃんと一緒にいたいなら、それなりに学ばないとね」

『はあ？』

「ここは学校って言って、ペットや動物が入っちゃいけない場所なんだ」

『オレはペットでも動物でもねーぞ』

「あはは、確かにね。だけど人間でもないでしょ？だから、僕ら以外の誰かにバレたらまずいんだよ」

『ふーん』

聞いているのかわからないような返事に、紫苑は小さくため息をついた。

ひたすらクッキーをかじるその姿は、非常に愛らしい。昨日の化け物じみた姿の面影はまるでなく、どこか毒気も抜けたようだった。

「よっぽど気に入ったんだね」

『ああ、うまいぞコレ』

「…璃玖ちゃんのこと」

図星なのか、遊魂はクッキーのかけらを喉に詰まらせかけて、盛大に咳き込んだのだった。

四季折々・・・END

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7119j/>

---

赤夜

2010年10月10日22時40分発行